小林多喜二「オルグ」草稿ノート研究

― 雄松堂書店ＤＶＤ・ＲＯＭ版にもとづいて ―

尾西康充

1

島村輝、日高昭二、荻野富士夫、ノーマ・フィールドの研究者諸氏が編集委員を務める小林多喜二直筆資料デジタル版刊行委員会によって「ＤＶＤ―ＲＯＭ版小林多喜二草稿ノート・直筆原稿」の編集作業が二〇一一年春の雄松堂書店からの刊行を目指してはじめられた。近年日本共産党中央委員会が所蔵するようになった草稿ノート一二冊に加えて、析々帳一冊、日本近代文学館が所蔵する「オルグ」草稿ノート一冊の計一四冊の直筆ノートのデータベース化が進められた。同時に「蟹工船」や「工場細胞」、「転形期の人々」、「不在地主」、「党生活者」などの直筆原稿一二点と主要作品二三点の初出形のデータベース化もおこなわれ、「多喜二の創作過程の源流から河口までを、緻密に検証することが可能」になる基本資料がまとめられることになった。[1] 多喜二研究の大きな転換点となるこの企画に幸運にも私は参加することができ、「オルグ」草稿ノート他の解説執筆を担当した。しかし文字数の制限のために草稿ノートの主だった特徴しか触れることができなかった。そこで本論文は、草稿ノートと初出形との異同に着目しながら「オルグ」の作品としての性格を詳らかにしようと考える。

「オルグ」は「改造」一九三〇年四月号から六月号までに分載された「工場細胞」の第二部に当たる作品で、同誌一九三一年五月号に掲載された。多喜二は一九三〇年八月二一日に日本共産党への資金援助によって治安維持法違反容疑で起訴されて豊多摩刑務所に拘留され、（『蟹工船』の表現をめぐる不敬罪による追起訴も加わって）翌年一月二二日に保釈されるまで独房生活を体験した。「わが方針書」（「読売新聞」、一九三一年三月二四、二五、二七、二八日）によれば、多喜二は独房生活の間に「『キング』に出ている『心の月日』や『黄金仮面』や『ガラマサどん』を何ベンも読みかえしてみたり、料理の作り方から、薬の広告から『どりこの』の広告まで、丹念に読みかえした」という。「心の月日」は菊池寛、「黄金仮面」は江戸川乱歩、「ガラマサどん」は佐々木邦が執筆した大衆小説で、それらが連載された講談社の大衆雑誌「キング」には強壮滋養飲料「どりこの」の広告が毎号掲載されていた。それらに触れることを通じて大衆に迎えられる小説の傾向を把握することができた多喜二は、プロットに富んだ作品が通俗的であるとみなすのは論外だとする。プロットの多寡は「階級的な立場」が「反映」した結果で、プロットに富んだ小説には「己れ自らの身体を没入させて働く人」が、プロットの貧しい小説には「嵐

を避けて書斎の中に静かな思惟を求める人若くは求め勝ちな人」が対応し、プロレタリア文学にとってある小説が「芸術である場合、如何に秀れたものであろうと、レーニンの論文を読む時のような又は算式を解く時のような懸命な努力と少くとも辛抱は絶対に！　あってはならないのだ」という。

「オルグ」草稿ノートは縦二二・五×横一七・〇センチ、ノートの表紙は欠落し、一～七頁および一六六頁以降が脱落している。縦置、縦書、黒色ペン字。各頁の右肩に頁番号が記されている。ノートの奇数頁は見開いたノートの上側、偶数頁は下側に当たり、奇数頁に書き込まれた本文の補足や追加などの推敲が偶数頁でおこなわれている。初出雑誌では伏字になっている「×××」は、ノート稿では「共産党」と明記されている。現在遺されている八～一六五頁には、「オルグ」（上一「掌テニス」）の場面から作品結末までに当たる内容が記され（『全集』第三巻、二一〇～三〇八頁）、一六五頁最後には「（一九三一・三・三）」と書き込まれている。全集二一三頁に当たる、工員たちの「掌テニス」の場面からはじまっているノート稿は、豊多摩刑務所から保釈された多喜二が神奈川県厚木にある七沢温泉の福元館の離れで静養中に執筆された。

2

最初に「オルグ」のあらすじの前半を紹介しておこう。H地方のT町にあるH・S製罐会社では、函詰(パッキング)や修繕、旋盤、仕上、倉庫、腰付(ボディライン、第一工場)、蓋作(トップライン、第二工場)、漆付(ラッカー、第三工場)など労働者たちが技能ごとに部門化されて就業していた。「Yのフォード」と呼ばれる家族主義経営が評価され、「模範工場と云ふ伝統的な堕勢」がみなぎっていたために、労働者は権利意識が弱められていた。しかし普段は部門ごとに分断されている労働者たちに共通する待遇改善の要求が掲げられた工場大会をきっかけに、従業員が横断的に団結する工場委員会が結成された。「オルグ」森本を中心とする工場委員会は、労働組合を社会民主主義派に売り渡してしまった「髯の源ちやん」に対抗して革命的反対派と自称し、日本労働組合全国協議会（全協）日本金属労働組合Y支部に属する分会として反対工作を地下ではじめた。「髯の源ちやん」は四三歳、三・一五事件の際にも検挙された運動家なのだが、組合員が検挙されるたびに「若いものの『策動』」だとし、「三・一五事件の連中の轍を踏んでくれるな」とオルグ河田にクギを指してきた。「髯の源ちやん」によれば、日本共産党の主張には共感するところもあるが「まだ日本の労働者の九十九％はあのスローガンを理解して、自分のものにする処までは行ってゐない」という。社会民主主義派のO合同労働組合執行委員長を務める彼は、秋の市会議員選挙には組合の地盤から立候補することになっていた。

H地方のオルグ河田の指導に従って分会員がメンバーとなった金属、印刷、ゴムなどの工場代表者会議が開かれるようになるが、警察当局によってでっちあげられた共産党事件のために、半年も経たないうちに若い同志がつぎつぎに検挙されることになった。H・S製罐会社が金菱と合併した金菱製罐会社は、この共産党事件を巧みに利用して従業員を分断し馘首をおこなった。警察に勾留され「馴致」された

森本によって、工場委員会の「中心分子」が警察に売り渡された結果「これんばかしの動揺」も起こすことなく人員整理がおこなわれてしまったのであった。

しかし検挙もれで身を隠していた石川がY地区で再び活動をはじめ、帝×製麻、金山紡績、東×セルロイド、大×鉄工所などに分会を組織しようと試みる。帝×製麻は事業不振のために六割という高率の操業短縮をおこなっているが、軍需品製造の指定工場なので、休止機械手入費として政府から特別補助金を得ていた。他方、金山紡績は中国銀塊相場下落、インドの関税防壁、金解禁等々の影響で三割五分の操業短縮と馘首をおこなっている。労働組合の「ダラ幹」と経営者との間で退職手当の取引をするだけで馘首が実施されていたが、その裏で毎日のように新規採用もおこなわれていた。それは経営者による巧妙な人員合理化で、半年から一年の間に高給の熟練女工を退職させて、彼女たちの三分の一程度の賃金で雇用できる一六、七歳の「新鮮な」女工に替えようとしているのであった。

金菱製罐会社で共産党事件が発生すると、「新聞にデカ〳〵と人相のあまりよくない男の写真が並んで出た記事」を読んだだけしか共産党に関する知識のない工員たちには、「自分たちと毎日働いてゐた仲間にそんな恐ろしい労働者の食ひものがゐたのか」と思われた。「今迄森本と近しかつたものや、『工場大会』の力でたゝかひ取つた自主的な工場委員会のメンバー達から、コソ〳〵と離れ出した」とともに、「中心的分子」が一般従業員から浮き上がった存在になった。従業員は口々に「親の脛かぢつて勝手なことばかりしてゐる学生や、組合にばかりゐると思ツてたんだが」、「驚いたもんだ！　それに皆なおとなしいものばかりだ、油断がならないや！」と叫び、共産党の悪口をいうことで職長に対して自分が「そんな危ない奴ぢやない」ことをアピールするようになる。

このように書き出された「オルグ」の創作意図に関して、多喜二は「小説作法」（『綜合プロレタリア芸術講座』第二巻「文学篇」、一九三一年六月）のなかで詳細に語っている。多喜二は日本プロレタリア作家同盟のスローガンとして、階級闘争を目指すマルクス主義的な「主題の強化」や戦闘的プロレタリアートの思想と感情に即した「内容の立場」の二点を掲げながら、この作品を通して「地下に沈んで工場の組織の仕事に働いているオルグの生活を、弾圧を受けて壊滅に瀕した『金菱製罐工場』の組織の再建強化の過程と結びつけて描き出そうと試みた」という。

3

では具体的にどのような推敲がおこなわれたのかをノートから読みとって、「オルグ」創作過程を検証してみよう。「上一」で、昼休憩中に倉庫の屋上へあがってきたお君とお芳がこのたびの検挙事件を話題にし、お芳が「あたし何だか、今度のことまだ〳〵すまない気がして困るのよ……」と危惧するのに対し、お君は「バカ！」と突っ撥ねる場面がある。初出では、お君の強さに対してお芳の弱さという性格の違いが前面に押し出されているが、ノート稿では、森本が獄中で同志を売り渡したことをお芳がすでに知っていたために、このような気弱な発言したことになっている。それをお君が遅ればせながら気づく

のは、翌日重役室に呼び出されて二人の私服警官から森本との関係を尋問され、逮捕はされなかったものの、その場で社長から解雇の辞令を押し付けられたときであった。ノート稿一四頁には、初出では省かれたつぎのような一節が記されていた。

お君はその紙片を持つて、重役室を出ながら、――これで何もかも分つたと思つた。

信公やお芳や、それから気になつてゐた若い人たちの自分に対する奇妙な態度[2]も。

ノート稿の方がお君の落胆ぶりが明らかになるとともに、森本との愛情関係のためにそれまで信頼し合っていた仲間からも孤立してしまって職場を去るお君の姿が一層鮮明にされる。他方初出は、森本と関係のある工場委員ばかりが尋問に呼び出されるのを目の当たりにしたお君が「若しや？」と森本に対して疑念を抱きはじめる心理的変化が分かるようになっている。

お君が解雇された後、検挙もれで姿を隠していた石川が荒物屋に扮装してお芳のもとに来る。二人がお君の家に行くと、河田と留置場が同じだったという無銭飲食者によって河田からのレポが届けられたところであった。レポの冒頭、初出では「××の嵐」と伏字にされた箇所は、草稿では「拷問の嵐」と記されていたように、この場面で多喜二は特高警察による非道な拷問を描こうとしていた。ノート稿二三頁にはつぎのような一節が記されていた。

お君はその男から、中にゐる河田のことを色々と詳しくきいた。一週間程ブッ続けに拷問に会つてゐるらしく、調べに出て行く前何でもなかつた着物が、帰つてくると背中からヅタ〳〵に切れてゐたりした。然し、一番元気で留置場のなかで偉張つてゐると、その男が云つた。[3]

初出では省かれているものの、特高警察による拷問を描いたこの一節は多喜二の文学にとって重要な意味を持つ。河田からのレポではさらに、ノート稿二五頁で「森本は中ですつかり裏切者になつたらしい。彼と直接つながつてゐた「H・S」のものは即急に注意しなければならない。君ちやんがこの際どうしなければならないかは、自らハツキリしてゐる。君からも話してやつてくれ。君ちやんはタイジな人間だ。」とあるが、この部分は多喜二自身が黒色ペンで上から消している。[4]森本の裏切りはこのレポによってはっきりするのである。

「上四」には、石川が仮名村越、同志Kと街頭連絡する場面がある。同志Kによれば、「中央部は、三、四人しか残ってゐない。だから×独自の活動は殆ど出来ない」という劣勢に立たされているにもかかわらず、「日本の×は、世界の六分の一をしめてゐるプロレタリアだけの国にあるコミンテルンの一支部」であるために悲観することはないという。石川が金菱製罐会社で運動が行き詰っていることを話そうとすると、意外にも同志Kは石川以上に社内の闘争に関して詳しい情報を持っており、工場委員会での闘争が党独自の活動として「一度も強力なアジ・プロがなされなかつた」ことを問題視し、職場ニュースが発行を配布されたものの、共産党の活動とは結びつかない「ニュース読み的傾向」が工場内に生まれただけであったと非難する。はじめは少し呆気にとられていた石川は同志Kと握手をし「元気で！」と声を掛け合って別れる。この掛け声の直後、ノート稿五一頁にはつぎのような描写が書かれていた。

彼は返事の代りに、力をこめて、同志の小さい、柔かい手を握りかへした。この党員は労働者ではないかも知れない。その手は小さく柔かつた……。この同志も明日の生命をこの運動に賭けてゐるだらう。矢ツ張り「最後の風景」の仲間だ！　「ねえ君、この嵐の中だ。僕らは火が要るなら、火にならう。屍が要るなら、屍にもならう！」

同志は、そして、大股に歩んで、闇の中へ消えてしまつた。[5]

【作者によって黒色ペンで上から消去】

右の描写では、党中央に近い場所にいる同志Kは労働者出身ではない党員であることが暗示されている。同志Kの「小さい、柔かい手」へのこだわりは、多喜二の「身体＝ハビトゥスへの注視」として中村三春氏が指摘したように、「生々しい身体の突出、壊れものとしての人間を、敏感すぎる触感によって描いていた、小林の作家としての資質に根差す」ものと評価できよう。[6] 同じオルグであっても、握手をすればお互いの身体の微妙な違いが感じられるというのは、理論一辺倒に陥ってはいない多喜二の小説の魅力である。その同志Kは理論家として明晰な頭脳を持ち、各工場での闘争現場の詳細な情報を集め、「死ぬまで」戦うという決意を抱いている。「髯の源ちやん」の取り巻き連中が「組合は、俺たち労働者の温いクラブみてえになるのが本当なんだ」と話しているのとは正反対である。彼らからみれば同志Kは理論ばかりが先走る「学生向の左翼フアン病」となるし、逆に同志Kの立場からすれば彼らは現状容認の「追随主義」、「足ぶみ主義」で大衆と前衛との間にギャップを設けて前衛を遊離させようとする裏切り者にみえる。多喜二は右の描写で労働者出身の党員を描きながらも同時に、その英雄主義が過剰にならないように慎重になっていたとも思われる。

4

「中七」では、お君の下宿で起居をともにするようになった石川が風邪を引くと、お君は彼の「部署」を引き受け、彼の替わりに「仕事」をおこなうようになる。熱が少し下がると早速起き出して出かけてゆく石川に、お君は次第に「親味」を感じはじめ、「汚れた猿又や、メリヤスのシャツや、それに自分の汚れものを持つて、裏口へ出て行つた」という場面、ノート稿九〇頁にはつぎのように書かれている。

石川は事情あつて外の女と一緒に運動しなければならなくなる。すると、運動の形態の必然が、外の女と関係させる。その女がお君の友達であり同志である。――さうなるとお君は苦しむ。石川はその苦しむお君をケイベツする。[7]

【作者によって黒色ペンで上から消去】

右の言葉が記された頁の上側には、七〇割る一五、九〇割る六という筆算が書き込まれ、これらの数字もまた上から黒色ペンで消されている。残りの頁数を計算しながら、運動と愛情がねじれてしまう関係がこの後に続く物語展開として考えられていたのだと思われる。この続きの場面で、帰宅した石川が運動の現状をお君に語るところ、ノート稿九四頁には「必要　石川の言葉を労働者風にすること。」と枠で囲まれて記されている。[8] 黒色ペンで上から消されているが、前出の同志Kとは違って労働者階級出身のオルグとして石川を特徴づけようと

していたことが分かる。

「下一一」で帰宅した石川をお君が迎える場面、「あ、あ、でも、今日も無事で帰つて来た！　――お君は、初めて肩から力を抜く。それが毎日だった」とある。そして「この頃では、晩飯に一緒になれるなどと云ふことは殆どないと云つてよかつた」と続く間に、ノート稿一二三、一二五頁ではつぎのような一節が記されていた。

「でも、見当違いね。――もとはさうだからつてね。」

「金菱製罐」が動き出してから、芳ちやんとの連絡で、お君も殆んど毎日にやうに出なければならなかつた。工場の中の事情もくわしく知つてゐるので、単純なレポーターでなしに、逆に重要な全協のメンバーは、動揺が起きかけてから、ドシ〳〵殖えて行つた。表には出ずに「懇談会」や、寄り合ひ従業員――此処でも、何より必要が彼等を動員してゐた。

「戦々きよう〳〵」としてゐる従業員は、自分たちの職場々々で、「相談会」のやうなものを何べんも開いて、善後策を講じてゐた。その中に、「メンバー」になつてゐる従業員がキツト一、二人もぐつてゐて、巧妙にアヂつた。――今のところ勿論表に出て仕事するわけには行かなかつたが、そしてないが、そういふ相談会の中から、分会に獲得出来るものが、一回に一人二人はあつたのだ。

彼等自身の力で、――下から、ストライキ委員会を作りあげる。それのみが、どんなダラ幹にも、どんな弾圧にも堪えるタツタ一つの鉄の如き組織だ。そこへ持つて行くために、主力が注がれてゐた……。

晩飯に、二人が一緒になれたことは、この数月なかつたことだ。めづらしく、二人はゆつくり、テーブルに坐つた。

石川はY地区全体の仕事を持つてゐたので、[8]【作者によって黒色ペンで上から消去】

右の描写のなかには、文意が通らない箇所があり、まだ推敲の途中であったことが分かるのだが、石川とお君は運動の情報を共有できる、心を許しあう同志であることが描かれている。

「中一一」の冒頭に当たるノート稿一二三頁には、「9　ロボツト」と章番号とタイトルが記されていた。黒色ペンで上から消されているものの、たとえ共同生活を送っても個人的な感情を抑えて地下活動に専念する鋼鉄の意志を持つ「ロボツト」のようなオルグの姿がテーマとされていたと思われる。夕飯を終えて原稿を書いていた石川は一時間程かけて封書三通を書き上げた。そして石川が拳固にした両手を突きのばして寛いだ場面、ノート稿一二九頁にはつぎのような一節が記されていた。

襖を隔てた隣りの室で、お君が帯をとき、着物を脱いでゐる音を、彼はそれを室の中で聞いてゐた――彼は今晩は又、展々反そくしなければ眠れないのだなと思つた……[10]。【作者によって黒色ペンで上から消去】

ノート稿一二九頁には、お君からの感情に薄々気づいていた石川が、もし自分が検挙されれば「少なくとも十年は持つて行かれる身体」なので「自分さへ我慢が出来たら、我慢して行つた方が『いゝ』」と考えていたというくだりに、「後で、そしてそのために、お君が少しでも不幸にならぬやうに、――矢ツ張り我慢すべきだと思ツた」という

一節が続けられていた。これも黒色ペンで上から消されているのだが、石川の強い自制心が示された表現である。さらにノート稿一三〇頁には、疲労して帰宅した石川が、床に入っても興奮して眠れないでいると、「まるで狂暴的にお君の室に入つて行くこと」を考えてしまう場面がある。「然し、彼は何時でも最後のドタン場でそれを踏みこらえてきた」とその考えは即座に否定されるのだが、これに続けてつぎのような一節が記されていた。

彼は時々自×をした。彼はそんな時、何度か自×さへした。そして次の日、頭が重いとき、彼はかへつて、かういふ事で苦しむことも、又間違つてゐるのではないかと考へた。

……隣りでは、着物を脱いだ。寝巻をきてゐる。――細紐をしめてゐる。パチン。

――電燈を消したのだ。蒲団のあふりの音に彼はヂイと耳をすました。彼はその些細などの音をきいてゐた。彼はしばらくぢつとしてゐた。

――あ、寝かへりを打つてゐる。[1-1]【作者によって黒色ペンで上から消去】

前掲の「小説作法」では、「オルグ」には「人物は二人しか出て来ない」とされ、「私はお君という人間の性格が最も好きで、それにぞッこん惚れている」とある。石川とお君の関係、とりわけお君の人物像が大切に造形されていたのである。ノート稿一三一頁には、

彼は深く息を吸ひ込んで、眼を閉ぢた。お君の寝返へりを打つてゐる音を、彼は何度か聞きながら、……眠つてしまつた。新しい明日の闘争が待つてゐる。そのために！

「ロボツト」！

「ロボツト」！[1-2]【作者によって黒色ペンで上から消去】

とあり、「ロボツト」という言葉が繰り返されている。石川は「女と関係があつたために、優れた同志がドジを踏んだ実例を二、三知つてゐた。だが、彼は、運動をしてゐるものが、恋をしてはいけないとは、露さらに思つてゐない。然し、それと同時に、余ツ程しつかりしてゐないと動きがとれない事になるものだ」と考えていた。戦後になって「近代文学」同人の平野謙や近代文学研究者の中山和子他によって、地下生活を送っていた日本共産党員が女性協力者を〝ハウスキーパー〟として利用していたと、彼らの非人間性が批判されたことがあった。多喜二がここで用いている「ロボツト」という言葉は、平野たちの主張とは反対に、女性同志に対して性的な関係を持つことをみずから戒め、鋼鉄の自制心をもって任務を遂行するオルグの喩として使われている。ノーマ・フィールド氏が指摘しているように、「お君が語る『愛情』はどちらかといえば精神的で、石川のそれは逆に「我慢」すべき性欲を意味する」ことが多いのだが[1-3]、多喜二は性別による「愛情」の相違に触れながらも、ここには志賀直哉や有島武郎たち白樺派の文学作品に接して自己形成を遂げた青年層のひとりとして、青年が人格的に成長する過程において自己の性欲を抑制することが倫理的に避けることのできない問いであるとしてとらえた白樺派の問題設定に通じるものがあると考えられる。しばしば自我の拡張は他我の縮小と裏腹の関係にあるが、白樺派の作家たちはそれを性欲の奔出と抑制という問題に具体化して理想と現実のジレンマを描いた。多喜二が本来個人的な問題であるはずの性欲の克服をマルクス主義的な集団の倫理に繋が

るための試練の一つとして描き出しているのは、多喜二が反共デマに対する反論という政治的モチーフを抱いてこの小説を創作しているものの、集団の価値を個人の価値の上位に措こうとするという運動や組織の〝非人間性〟から導き出されたものとのみとらえるのではなく、性欲と人格をめぐる相克をテーマにするという大正期以来の文学作品に強く影響されて生み出された文学的表現の一つでもあったと考えられるのではないか。たとえば自然から分与された本能に従って生きることが人間の解放をもたらすと主張した有島武郎の本能的生活論は個人の本能に価値を一元化させて集団を止揚しようとするもので、多喜二の主張とは一見正反対のように思われるが、眼前の階級社会をその根本から改造しようとする作家のモチーフは通底している。理想社会を建設する人間の比喩的な表現として有島は「自然人」、多喜二は「ロボット」を使用し、どちらも〈革命的な〉結論にたどり着いていたと考えられるのである。

5

前掲の「小説作法」のなかで、多喜二は「石川とお君の生活」に関して「その個人的な生活」をかなりの分量で触れているが、「工場の集団の生活・集会と個人の生活とが織り合っている」もので「プロレタリアートを取り扱う場合、何時でもその個人の生活は集団の生活に裏打ちされていなければならない」とする。さらに多喜二は「愛情の問題」に関してつぎのように主張している。

然し私が石川とお君の生活を描くことによって、在来地下に潜って生活している我等の前衛の生活を、その正しい姿で示すことが大きな眼目だった。殊にその愛情の問題に於て色々と歪曲され、デマの材料にされているとき、私はその必要を覚えたのである。

運動と恋愛を結びつけてヒーローの勇姿と人間味を描くことは多喜二に限らず古今東西の政治小説の特徴で、硬軟あわせもった内容は一般大衆に歓迎されやすい。島村輝氏は江間修や片岡鉄平の作品によって描かれた活動家の精神的・肉体的欲求と活動の欲求が生じる矛盾に社会的関心が集まっていたことを大いに意識させられていた多喜二が「作中を生きて動く登場人物に対する、記述者の側の『フェティシュ』なまなざし」を通してお君を描いていたことを指摘している。[14] プロレタリア作家たちも白樺派が提出した問題設定をふまえて性欲と運動のジレンマを描こうとしていたのである。ノート稿までさかのぼって「オルグ」創作過程を検証すると、多喜二は英雄主義的な表現を極力排しながら、反共デマに対する反論として地下生活者たちの「正しい姿」を慎重に描き出そうと努めていたことが分かる。布野栄一氏によれば、この正しさの裏面には「石川とお君の相互の敬愛と、結ばれることなく運動に殉ずる姿は、作者の理想を反映した構図であったろうが、非情の冷たさ」があり、それは「作者が強調したプロレタリヤの倫理の、血の通わない観念性に由来する」ものであったというのだが、[15] 与えられた〝正しい〟プログラム以外の行動をしない、〝血の通わない〟「ロボット」のようにみえるとされたオルグの姿は、ノーマ・フィールド氏が指摘しているように、作品結末で異なる相貌を呈するようになる。「下一五」では、「血で塗られたメーデー闘争」の後に「第二弾の闘争」として金菱製罐のストライキが計画されてい

た。オルグとの打ち合わせを済ませてお君の家に帰った石川は、翌朝特高警察の家宅捜査を受ける。すぐにその場を脱出して電車に乗ったものの、特高警察による包囲網を知らないお君が夜勤を終えてまもなく帰宅することに気づく。つぎの停留所で電車を降りると「彼はこの瞬間ほど、お君を愛してゐる自分を強く、強く感じたことはなかつた」という。しかし「かつてこれと似た場合に失敗つた同志」がいたことに思い当たると「組織は死守されねばならない！」と自戒して円タクに乗り込んだ。運転手に「『Y』へやってくれ。」といった石川は「つばをのみこむ時のように、ゴクリとのどをならした――」。この部分はノート稿一六五頁では元々「彼はつばをのみこむやうに、さう云つた」と書かれていたのを、より写実的なものに修正し、円タクで立ち去る石川の心理描写に臨場感をもたせている。このような作品の結末についてノーマ・フィールド氏によれば、「石川がお君を検束に晒しても金菱の組織を守る決断は『小説作法』によれば、『正しい』にちがいないが、小説そのものは正しさよりも決断のあやふやさ、そして実行の辛さを当事者の身体的、ほとんど反射的反応として印象づけている。読者はこの先どうなるかわからないままに本を置かなければならない」とする。[16] 決して輝かしい未来が待っているのではなく、あらかじめ覚悟を決めていたものの、いざお君が検挙される危険にさらされると緊迫感に支配され、石川の脳裏には不安がよぎるのである。ここに「ロボット」ではない、血の通った人間の素顔がそこに垣間見られるのである。同じオルグとはいえ、同志Kと握手をすれば掌の感触を実感して相手の人となりを想像し、「労働者風」の言葉を話す石川は〝血の通わない〟「ロボット」では決してないのである。

「オルグ」創作過程を検証する際にとくに注視しなければならないのは、地下生活者の「愛情の問題」とならんで「武装メーデー」の場面の推敲である。ノート稿の末尾には「一九三一・三・三」と括弧書きされている。四・一六事件によって壊滅されられた日本共産党中央部は一九二九年七月上旬から田中清玄、前納善四郎、佐野博らを中心に再建され、三〇年に入って極左的偏向を一層激化させていた。「オルグ」でも「中央部は、三四人しか残っていない」ことに言及され、「赤色自衛団」が工場と職場を基礎に軍事的訓練の機関として結成されて、スト・カンパ・大衆動員等労働者農民の日常諸闘争の防衛を目的として活動することに触れられている。[17] 多喜二が「オルグ」創作のモデルにした川崎メーデー事件は、治安当局による弾圧に対しては「赤色自衛団」の「赤色テロ」によって抵抗するという武装闘争の方針に従って発生したものであった。極左的偏向が最も激化した一九三〇年のメーデーについて渡部徹氏は「この時期の全協の闘争には多かれ少なかれ暴力沙汰が必然的に附随し、しかもそれが英雄的闘争と賞賛された」とし、その原因は「当時党指導部をしめた田中清玄・佐野博らの『極左的小ブル革命主義』と『スパイ西山』が全協中央に潜入し武装蜂起を煽動」したとする。[18] だがこの直後に党内で自己批判がなされ、「労働新聞」五月二九日には「最近現われたる全協の極左的傾向と戦へ」、「無産青年」五月三一日に「我同盟の極左的傾向と戦へ」、「第二無産者新聞」六月一一日には「ボルシェビキ党の再建と極左的傾向に対する闘争の急務」が掲載されて、武装闘争方針が批判されるとともに、ニュース配布網による平和的地下活動が右翼的偏向として批判された。しかしこのような自己批判がおこなわれたものの七月に

は党中央部、八月には全協中央部が弾圧を受けて再び壊滅した。

ところで全協は一九二九年一〇月から党指導下ではじめられた「再建カンパ」において「一産業は一組合へ」というスローガンにもとづいて産業別協議会の結成が呼びかけられたが、翌月産業別単一組合の総連合即時結成に突如方針が転換され、この非現実的な方針に対して批判が生じるとともに、極左的偏向に対しても強い不満が湧き上がって、一九三〇年六月に刷新同盟派と本部派に分裂した。八月にプロフィンテルン第五回大会決議「日本に於ける革命的労働組合の任務」において全協の極左的偏向が厳しく批判され、指導部の更迭と反対派の除名禁止が勧告されて分派闘争の終結が指示された。だがその後も決議の解釈をめぐって論争が続き一九三一年三月になってようやく分裂が解消したのである。

多喜二は「オルグ」執筆の時点ではすでにこのような分裂劇の顛末を知っており、プロフィンテルン決議を豊多摩刑務所内で知ったときの衝撃を「独房」ノート稿の「9、『こら、何しとるんだ?』」のなかで告白している。

どのように批判されたかは知らない。然し、私は誤ったことをクソ真面目にやったゝめに、あたらこうして、一生を棒に振ったなぞとは、ちっとも考えない。勿論その当時われ〳〵の――「全協」の方針が誤まっていると分ったら、それは絶対にしてはならなかったろう、だが一旦なされたとき問題はちがってくる。

当時の客観的情勢に於て、われわれの力によって精一杯になされた事は、そのこと自体は決して無意味ではなかった。

危険なことは――このようにその方針の誤謬が指摘されたとき、そのことを以て、直ちに、「党」なら党自体に対する、「全協」なら全協そのものに対する幻滅に置きかえて、解党派に、或いは無為派に、或いは日和見派に転落してゆくことである。孤立されている獄中では、殊の外その危険が多い。

私はそういう先輩を沢山に知っている。

――だが、党でも全協でも、それは全能全智の「神様」なんだろうか。われわれは、若し誤ることを恐れたならば、何にもしない方がよかったのだ。むしろ、それよりも逆に、我々は、あまりにも少ししか誤ることがなかったのだ、それは何よりホンの少ししか仕事をしていなかった証拠だ、――そのことの方を恐れよう。

多喜二は「オルグ」執筆時には日本共産党員でも全協組合員でもなく、作家同盟に属する一人の作家として武装メーデーを作品化しようとした。開き直りや弁解の気持ちを込めることなく、「われわれの力によって精一杯になされた事は、そのこと自体は決して無意味ではなかった」と語って「党でも全協でも、それは全能全智の『神様』なんだろうか」という疑義を呈している。多喜二のこの疑問はきわめて重要で、このとき多喜二は組織の闘争方針を決定する幹部の立場ではなく、幹部の誤った指導に翻弄される一組合員の立場から発言している。幹部は大きな誤謬を犯したかもしれないが自分たちは「あまりにも少ししか誤ることがなかったのだ」という。プロフィンテルン第五回大会に出席した蔵原惟人は、多喜二の作品にみられた「セクト主義」を痛切に批判しながら、作家が運動の「単なる傍観者」ではなく「積極的参加者」であることを要求したのだが、このような蔵原の発言は

指導者としての立場からのものであるのに対して、多喜二の発言は「誤ったことをクソ真面目にやった」ために投獄され、しかも後から自己批判を求められるという〝クソ真面目な〟労働者の立場を代弁したにすぎない。ここに多喜二の作家的良心があることを確信することができるだろう。ただし蔵原による批判は相当こたえたようで、多喜二はこの直後に「オルグ」を「原ッぱへ落としてきた見苦しい『野糞』でしかない」と振り返るようになる（「四つの関心」、「読売新聞」一九三一年六月一一日）。

多喜二は全協が分裂する原因となった産業別単一組合の総連合結成や武装闘争などの方針を「オルグ」のなかにそのまま持ち込んでいる。組織が分裂し、さらに大きな弾圧を招くきっかけとなった極左的偏向が特高警察によって送り込まれたスパイの仕業であったことは皮肉な歴史だが、「オルグ」においても「戦線がめッたやたらに引ッこ抜かれた後には、『居直り』のスパイではなしに、はなッからのスパイに紛れ込まれ易い危険をもつている」（上四）とスパイの潜入を警戒している。

「下一二」では石川を中心に金菱製罐の西国、金山紡績の須田、帝×製麻の筑土、東×セルロイドの今川がメーデー闘争の戦術について話し合う。石川は市内を廻る官許の葬式行列ではなく、労働者が密集している工場地帯で革命的なデモをする必要があるとし、「我々はこの革命的デモンストレーションを決行するに際して、白色テロルに対して、充分対抗の出来る『赤色自衛団』を組織しなければならないのだ」と主張する。それに対して筑土が「今のこと、俺全部サンセイです。たゞ、ようやく組織が工場の中へ根をおろしかけている時、その方針が余程ウマクやられないと、組織を破壊してしまつたり、職場内にゐる労働者を街頭に押し出すやうな極左に流れるおそれがあると思うんです。この点を……。」と発言する。すると石川は「そうだ。そうなんだ。だから、別動隊の組織はメーデー闘争としては戦術的意味でしかないんだ」と応え、「彼も筑土と同じく、自分たちの力を過重評価するところからくる極左的な危険を感じてゐたので、別動隊は主として××自由労働組合のメンバーを以つて構成することを考えてゐた」という内容からはじまる闘争案を提示した。このように武装闘争を抑えようとする場面もあるのだが、メーデーの朝になると別動隊は「ドス、石を結んだ手拭、棍棒……」で武装し、トラックから飛び降りて立ちふさがろうとした顎紐の警官を倒して前進した。この結果二組にわかれて行動した別動隊も最後は抜剣した警官隊によって壊滅させられる。「オルグ」では極左偏向が直接批判される場面はなく、西国やお芳たちの「ひるまない努力によつて、『馘首賃下反対闘争委員会』は巧みにメーデーの準備闘争を取りあげて、新しい分会員を三人も獲得するところまで行つた」とされる。つまり〝クソ真面目な〟労働者の「ひるまない努力」が少ないながらも成果をあげたことが評価されるのである。他方、石川は「血で塗られたメーデー闘争」の後をうけて「第二段の闘争」として金菱製罐のストライキを計画し、運動を継続発展させることに専念している。

6

では武装メーデーの場面がどのように推敲されて書き進められてい

ったのかをノート稿にもとづいて検証してみよう。全集二八一頁からはじまる「下一二」の場面は、ノート稿一三〇～一三三頁からの改変が著しいため、全集解題（六二八～六三〇頁）に原文がノート稿から復元されて掲載されている。メーデーの闘争方針を確立した全協から指令を受けた石川がＹ地区の責任者として具体的な行動を立案している場面である。メーデー前日の早朝、電車道から工場地帯に向かう労働者の群れに向かって日本共産党のビラが撒かれる。ノート稿一三七、一三九頁にはつぎのような一節が記されていた。

「お前え、見たンか？」

機械のカバーを跳ねのけて、油を差してまはりながら、×××の職工が、相棒に云つた。

「見た。――社会主義者も楽でねえンだな。」

「驚いた。俺はぢめて、あンなとこ見たよ。――まるンで、命がけでねえか。」

スウイッチを入れて、調子を合せて、それから油手を布切れにぬぐつた。

「うンとこさ何処かから金でも貰らつてゐるんだらう。さうでなかつたらな……。」

「バカ！　金が無えから、社会主義者になつてゐるんだよ。」

「それアさうだらうがな……。俺まだ一度もメーデーに行つたことも無いし。見たこともないんだよ。」

「俺もよ。労働者がメーデーを知らないなんて名折れだ！」

元の社長は、――こゝは模範工場で、諸君は少しの不満もなく働いてゐるのだから、メメーデーなんか出なくてもいゝだらう――と云つた。誰も、それアさうだ、と考へてゐた。

だが今「Ｙのフオード」は、すつかり変つてゐた。

「な、ストライキになつたら、皆なでメーデーへ押しかけて行くんだな。」

「歌知つてるか？」

「知るもんか。――みんなの後から、手だけ振つて行くさ。」

仕事が始まる頃、職長が廻つてきた。

「今朝ビラを拾つたものは、渡してくれ。後でかくして持つてゐるのが分ると、警察に引張られるつて、工長から云つて来たから。」

「持つてゐない。」

他の方では、ポケツトの腹を引ツくりかへしにして、隅にたまつてゐたポケツト糞をはたき出して見せてゐた。その日一日工場の外を、五六人の警官が見張りをしてゐた。「全協」の分会員であるお芳其他の四、五人は、この動揺を捕らへて、ストライキ闘争をメーデーのデモに結びつけるために、全力を注ぐ。さういふ指令をうけてゐた。

会社の腹は何処にあるのか？　態度を示さない！[19]【作者によって黒色ペンで上から消去】

「下一四」にはメーデーの早朝、全協の組合員によって「分散デモ」が展開される場面がノート稿一五一、一五三頁に記されている。これらは全集二九九頁一二行目の後に入る部分である。

【一五一頁】

同じ朝、Ｙ地区のあの橋の袂を左に折れた、運河の手前の空地に、三人、二人、三人――袢天の男、ナツパ服が集まつてきた。

同じ橋の袂を反対に右へ三町程行つた建築中の囲ひの廻はつた裏の空地へ、同じやうに袢天、ナツパ服、学生と分る男が集まつてきた。

――官憲の襲撃の焦点をそらす「分散デモ」が行はれやうとしてゐるのだ。

工場へ！

この　別動隊は、工場から、工場へ、デモをもつて押しかけて行く。

それは、刻々と雪だるまのやうに大きくなるのだ！

そして、左翼団体を除外して、銀行と会社とカフエー街と練つて行く作者によって黒色ペンで上から消去】

【一五三頁】

街から突入する計画にされてゐた。

管轄のY署では、その過半数がメーデー取締りのために、S公園の方へ動員されてゐる筈である。

巻ゲートルに地下タビ、玉石で結び目を作つた手拭、ドス……。

興奮にこはゞつた顔、唇をかんでゐる学生風の男、歩きまはつてゐる顔、顔、顔……。

隊伍が組まれた。ビラを持つた同志を、両側から守る武器を呑んでゐる同志たち。同志を列中から抜かないためには、腕を組まなければならない。然し、この決死的な、衝突したら血を見ずにはおかれない「行動隊」が、敵のテロに対して攻勢力に出て充分武器を使つて闘ふためには、腕を組んではならなかつた。

歌声が起つた。

聞け万国の労働者

……

然し、それは空地を出ないうちに、「×旗の歌」に変つてゐた。

工場へ！

「金菱製罐へ！」

ワツショ、ワツショ、ワツショ……ワツショ！

×旗の歌がその後に続いた。

表で荷作りをしてゐた商店の小僧が、家の中へかけ込んで行つた。ガラツ、ガラツ、ガラツ……と沿道一帯の家の戸が開いて、主人、おかみさん、小僧が飛び出してきた。往来を歩いてゐたものは、あはてゝ道を除けた。――見る〳〵人垣[20]

【作者によって黒色ペンで上から消去】

右の描写では「この決死的な、衝突したら血を見ずにはおかれない『行動隊』」が「敵のテロに対して攻勢力に出て充分武器を使つて闘ふためには、腕を組んではならなかつた」という武装闘争が過剰に描かれているが、初出では削除されている。おそらく多喜二が暴力的な描写を抑制しようと試みたのだと考えられ、無批判に極左的偏向に与していたわけでは決してないことが分かる。

「下一四」の末尾は、メーデー翌日の五月二日に金菱製罐会社が五〇人の馘首を発表する場面で終わるのだが、ノート稿一五七

頁にはつぎのような「社長の訓示」が記されていた。

社長は訓辞の最後を次のやうな云い方で結んだ—

「……我同胞が幾百幾千の血を流して購ひ得たカムチヤツカに於ける権利を、かの社会主義の国ロシアが、五ケ年計画によつて、組織的に、計画的に浸しよくしやうとたくらんでゐるのであつて、この度の解雇についても、従つて「金菱」一会社の問題ではない、実に日本帝国の問題であるのであつて、決して軽挙盲動のないやう、呉々も申のべて置く次第です。——諸君の首を切つたものは、誰でもない、実に、あの憎むべきロシアである、といふことをお忘れないやうにして頂きたいのであります……。」[21]

馘首を断行した金菱製罐会社の横暴を、「社会主義の国ロシア」に対する日本帝国の問題にすり換えて正当化している。これは「蟹工船」（「戦旗」第二巻第五、六号、一九二九年五、六月）でも苛酷な労働搾取を漁夫や雑夫に受け入れさせるために使われた詭弁と同じものである。この詭弁がいかに不当なものであるのかを一般読者に訴えようとするところに多喜二の小説のモチーフがおかれているのである。

注（1）雄松堂書店出版事業部「DVD—ROM版　小林多喜二草稿ノート直筆原稿」チラシ

（2）全集二一六頁六行目に当たる。

（3）全集二二〇頁七行目のつぎに入る。

（4）全集二二一頁五行目のつぎに入る。

（5）全集二三五頁最終行のつぎに入る。

（6）中村三春「『文学』としての小林多喜二」（「国文学解釈と鑑賞」別冊、二〇〇六年九月、一五四頁）

（7）全集二五八頁一三行目のつぎに入る。

（8）全集二五九頁一四行目の後の部分。

（9）全集二七八頁九行目のつぎに入る。

（10）全集二八〇頁五行目のつぎに入る。

（11）全集二八一頁五行目「然し、彼は何時でも最後のドタン場でそれを踏みこらえてきた」のつぎに入る。

（12）全集二八一頁一四行目のつぎに入る。

（13）ノーマ・フィールド『小林多喜二——二一世紀にどう読むか』（二〇〇九年一月、岩波書店、一八六頁）

（14）島村輝「小林多喜二と『改造』——『工場細胞』から『地区の人々』まで」（紅野敏郎・日高昭二編『「改造」直筆原稿の研究』、二〇〇七年一一月、雄松堂出版、一八二、一八五頁）、さらに島村氏は「オルグ」結末について、石川がお君のもとに引き返すのを止めたことは「運動の犠牲だから当たり前」とするのではなく、「本当にこの切ない気持を味あわせてしまっている根源はどこにあるのか」、「なにがこんな切ない気持ちにさせているのか」という問題が喚起されるように多喜二が描写していることを指摘している（「ラブシーンの達人・小林多喜二——人権感覚と『愛情の問題』」、「二〇〇七年多喜二の火を継ぐ『大阪多喜二祭』&『多喜二サロン』報告集」、二〇〇八年二月、大阪多喜二祭実行委員会、一九頁）

（15）布野栄一「『工場細胞』・『オルグ』の距離」（「語文」第九号、一九六〇年六月、八頁）

（16）前掲（13）、一八八頁

（17）渡部徹『日本労働組合運動史』（一九五四年七月、青木書店、一三四頁）。渡部氏は武装メーデーの様子について、つぎのように記述している。

かくてメーデーには、「全工場の労働者は武装ストライキ・デモ・で白色テロルを叩きつぶし資本家共を震えあがらせ……今度こそはメーデーを葬式行列に終らせるな」（全協「メーデー檄」）と煽動し、各地の革命的労働者は具体的に武装デモの準備をなし、東京では未遂に終ったが、メーデーデモの行先を途中で変更させて議会襲撃・官庁焼打を計画し、このためダイナマイト・竹槍が準備され、市電の婦人

車掌にさえ棍棒をもってゆけと指令し、川崎市では全協のメーデー参加禁止に憤激した日本化学労組日本石油分会の阿部作蔵らの革命的労働者は鶴見署襲撃を企て、各工場から武器を集めていたが、当時官許メーデー突入に変更し、各自武装の上ピストル・日本刀・メーデー旗・竹槍をもってメーデー行進の後を追って川崎に入り、メーデー会場に突入、「第一警戒線を突破し演壇近くまで進んだが発見され、官犬グラ幹と大格闘をやり」多数の負傷者をだし（「第二無新」五月七日二一号）このほか神戸その他でも武装デモが敢行されたのである（同書、一四〇頁）。

（18）同右書、一三五頁

（19）全集二九二頁一三行目のつぎに入る。

（20）全集二九九頁一二行目のつぎに入る。

（21）全集三〇三頁一二行目「五十人の馘首を発表したのは五月二日だった。」のつぎに入る。

小林多喜二の本文は新日本出版社版『小林多喜二』全集から引用したが、オルグに関しては初出誌「改造」一九三一年五月号に拠っている。なお旧字体は新字体に変えている。

（おにし　やすみつ、三重大学人文学部教授）